

古典落語

第二期 第一卷

飯島友治編
筑摩書房版

古 典 落 語

第二期 第一卷

昭和四十六年九月二十日第一刷発行

定価 一〇〇〇円

編 者 飯島友治

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京 二九一七六五（代表）
郵便番号 一〇一―九一
振替東京四一二三

印刷所 暁印刷

製本所 矢島製本

函デザイン・落合 茂

(分類) 0376 (製品) 17106 (出版社) 4604

落語ほどやさしい芸はないという、また、落語ほどむずかしい芸もないという。素人芸でも喝采を博するし、腕達者がいつも感銘を与えるとは限らぬからである。扇子一本と手拭一筋で演じ出される空間には、人生の機微が、さわやかな機知とともにあふれ出る。おおらかな人間の営為を、共感の微笑で包むのが落語の世界である。前受けをねらった笑いであらうめられた落語には、この微笑の小味な温もりが伝わりくることがない。旧い時代から庶民生活の哀歓を汲みあげて育まれてきた芸の豊饒さも、現代では感受されぬものとなりつつある。噺の中では田舎者は嘲弄の対象であるが、古典落語の本来の味わいになじめない現代人は、精神的な田舎者となったのであろうか。

古典落語は、正統な後継者をほとんど持たず、落語の背景となる社会的基盤も失い、近い将来、内容や演出の上で大きな変化があろう。磨かれ、刈りこまれて高座にあった芸は、どこまで堪能して味わえたのか。話芸としての洗練された語感も、時代の言葉とともに消えうせる運命にあるのではないか。ここに師匠方のお力添えを得て先の、『古典落語』五巻と合わせ、現存する代表的噺はほとんど全て収録できた。活字の限界の中で、話芸が築きあげてきた深い味わいを、書きとどめたい一念でこの仕事を始めたが、敬愛する三遊亭小圓朝師も今は病の身、師の芸の香は活字では伝うべくもない。健康がすぐれず、発刊が著しく遅れた。編集部の横田三良氏、面谷哲郎氏の寛大なお励しに、深くお礼を申しあげる。落語が笑いだけのものとならず、人の心の豊かな総りであらんことを。

凡 例

一、江戸語の発音・抑揚などを、なるべく忠実に再現するために、適宜仮名の使い分けを行ない、特に片仮名の半音を多用した。

〔例〕「それアそうだ」「俺ア」「何すんだア」「ヘエエ」「話イする」「この野郎オ」等

また、軽く発音する場合にも片仮名の半音を用いた。

〔例〕「こん畜生」||強い 「こん畜生」||軽い

二、ええの使い分け

〔例〕ええ きっかけに強く言う場合。「ええ…今日は」

肯定の返事と念を押す場合。「ええ、そうです」「本当ですよ、ええ」

えゝ 返事の場合。「えゝ、そうです」

えエ 軽い肯定の返事とえを引き延ばす場合。「えエ…そかい」「えエ、するとなにかい？」

エエ 聞き返しと語尾を強める場合。「エエ？ もう済んだかい」「しつかりしろよ、エエ」

エエ 軽いきっかけ。「エエ一席お笑いを……」

三、漢字と仮名を、その意味・内容に従って、適宜使い分けた。

〔例〕

餅を一つやろうか
ひとつよろしく願います

酒を一杯だけ飲む
人がいっぱいいる

四、音写したとき意味のとりにくい言葉には漢字を用い、また適宜あて字を用いた。

【例】 本^ン当^トに・葬^{もく}式^{しき}・私^あ・吉^し原^な・花^{はな}魁^{けい}・情^せ人^{にん}・相^あ手^て・俺^{おれ}・懷^{こころ}中^{ちゆう}・食^くる等

五、古典落語においては間の取り方が重要とされるが、それを間の程度に従って、「……」「……」「……」を使い分けた。なお、言葉の省略の場合も「……」を用いた。

六、解説および本文の中で用いた記号の使い分けは、次の通り。

「」 会^{やうご}話・引用等

『』 題名・出典等

() 演者の仕草・ト書等

〃 〃 諺・和歌・川柳等

〔 〕 編者による補足・語註・注釈等

へ 〃 歌曲等を唄う場合

↓ 〃 「……参照」の略

！ 〃 語尾を強める場合

？ 〃 疑問符

七、仕草やト書は、本文の支障にならぬ限り詳しく入れた。なおト書の中で、上手へとは演者の左手、上手後ろは奥座敷・勝手の方角を示し、下手はその反対になる。詳細については、『千早振る』の「芸談 稽古のために」を参照されたい。

目次

あたま山	林家正蔵	9
厄払い	桂文楽	19
文違い	三遊亭圓生	33
井戸の茶碗	古今亭志ん生	51
王子の狐	春風亭柳枝	69
三軒長屋	柳家小さん	87
転宅	蝶花楼馬楽	117
今戸の狐	金原亭馬生	135
景清	桂文楽	151
反魂香	林家正蔵	165

お茶汲み

古今亭 志ん生 179

夏の医者

三遊亭 圓生 189

富士詣り

三遊亭 小圓朝 203

搗屋幸兵衛

古今亭 志ん生 217

粗忽長屋

柳 家 小さん 231

鰻 沢

林 家 正蔵 247

千早振る

付・芸談 稽古のために

三遊亭 小圓朝 261

〔解説〕

時刻と暦 (飯島友治)

古
典
落
語

第 第
一 二
卷 期

あ
た
ま
山^{やま}

林
家
正
蔵

この噺は、落語が「落し噺」と呼ばれ、その醍醐味は筋よりむしろサゲにあるといわれた時代に出来た、ごく短いがすぐれた噺であり、正蔵師の十八番物である。ユーモアの神から見離され、落語の持ち味を理解できない連中からみれば、このくらい馬鹿馬鹿しい噺はないであらうが、『徒然草』の「堀池の僧正」をほほ笑んで読む人ならば、荒唐無稽のうちに哲理を見出し、無条件に傑作中のピカ一と喜び迎えるであらう。

『あたま山』は安永二年（一七七三）板『口拍子』の「天窓の池・同年板『坐笑産』の「梅の木・享和三年（二八〇三）板『いろ見草浮世の頭の木』「物語」などを参考にして文化年間（二八〇四—一七）から高座へ掛けていた噺である。参考までに原話の一つ、「梅の木」を述べてみよう。

——軒並びに浪人者二人あり。一人は至って道楽者、いま一人は天神を信仰し、不思議や頭に臥竜梅咲き乱れ、諸人見物に來り、數物代「見物料」山の如くに集まりければ、隣の浪人焼餅をやき夜中忍び入り頭の梅の木を根こぎにして盗み戻る。かの浪人力を落せしが、梅の木の跡池となり金魚わき出る。又隣の浪人來りいつの間にか煙草の脂をはたき込みければ、金魚残らずあがり、浪人いよ／＼力を落し、家主の内儀に逢ひ「拙者も重ね／＼の残念。いっそ頭の池へ身を投げようと存ずる」「お前は氣でも違ひはせぬか。手前の頭へ、どう身が投げられるものか」「イヤその儀も工夫致しおいた。お世話ながら、煙草筒（煙管入れ）を仕立てるやうに足から引つくり返して下され」

煙草筒云々……は筒を布でつくる場合は、裏面を表にして縫い上げ、それを逆さに裏返して表を出すからである。『あたま山』は筋が奇想天外なだけに、話半ばで客に矛盾撞着を感じさせないようにしなければならぬ。しかし、それはなかなか難しいことであり、正蔵師のような芸達者にしてはじめて出来るのである。

元來、この噺は二分程度の短い小咄であるから、他の演者たちは主に枕として使うだけであるが、正蔵師は独自の工夫により、旦那・幫間・芸者をからませたり、網打ちを加えたり、時には下座を使って音曲を入れるなどして、にぎやかな一席物の噺に作り上げている。したがって、この噺は、演出の時間を長くも短くも、たとえば二分でも、また本篇のように二十二、三分かけることも出来るから、その点、高座の時間の調節にはまことに都合がよい。

サゲは「逆さ落」

旅籠屋 宿屋・旅館の古名。辺鄙な地方の老人などは戦前までこの言い方をしていた。

語原は——わが国では、古代から、旅をする場合は食料・衣類・身の廻り品その他を旅籠（れいどう）^{旅籠}として使用」に入れて持ち歩き、泊まる場合は宿（しゆく）^宿の入口へこれを掛けておくならわしであった。旅籠屋（れいどうや）^{略して、旅籠}の名はこのようにして生まれ、中世には既に用いられていた。

江戸時代の初期、慶長（一五九六—一六一四）のはじめには、主要街道であつた東海道でさえ、宿場により遊女屋めいたものはあつたが、専業の旅籠屋はなく、部屋にゆとりのある（といつても一間か二間であるが）農家が副業的に商売をしていた旅籠屋が多かつた。

初期から中期へかけての旅籠屋は旅客を泊めても、ただ、部屋を提供するだけで「雑魚寝」食事は古くからのしきたりにより、客が所望すれば、持参した米と副食物を煮炊きして供し、小額の燃料費と泊り賃を請求するだけであつた。つまり、後に貧困の者が利用した木賃宿（きちんしゆく）^{木賃宿}の制度である。

参考ながら、街道筋に宿場（宿駅）が出来た主な理由は伝馬制度であるが、その発展は旅籠屋に負うところが多い。宿場に専業の旅籠屋が軒を並べはじめたのは元和（一六一五—二三）頃からであり、特に目立って多くなつたのは、諸大名の参勤交代制度が確立し、それにもなつて江戸の商工業が繁昌して町人の往来が頻繁になつた寛永（一六二四—四三）以来である。もっとも、旅籠屋で寝具を備え、酒食を出すようになったのは、はるか後のことである。（『一期』

第四卷『宿屋の仇討』

竜 普通はリ、ユ、ウまたはリ、ヨ、ウと読むが、本篇ではタツ。「十二支」では辰と書く。本来は中国で想像上の靈獸。竜・鳳・麟・亀を四靈といひ瑞祥視している。わが国では竜神・竜王などと敬い、池・沼・深淵・海に住み、天に昇つて雨を降らせると伝承され、昔は雨乞いの場合に祀つた。その姿を諸橋轍次博士は『十二支物語』辰の項で『爾雅（じが）

翼」の「竜に九似あり——竜の角は鹿に似たり、頭は駝に似たり、眼は鬼に似たり、項は蛇に似たり、腹は蟹に似たり、鱗は鯉に似たり、爪は鷹に似たり、掌は虎に似たり、耳は牛に似たり」を引用しておられる。

河童 想像上の怪物。昔は実在するものと全国的に堅く信じられ、その実見談や図録が豊富に残っている。川太郎・川小僧をはじめ、地方名を加えると数十の呼び名がある。形・習性は地方によって多少異なるが、共通点は童形。全身が帯黄青色、粘りと腥臭あり、手足に蹼をつけ、頭上の皿型蓋付きの凹には水を蓄える。水中を自由に泳ぎ廻り、水死人や水泳中の小児の尻子玉を抜き取り、陸に上があれば歩行する。皿中に水のある間は力が強く、それがこぼれると、途端に力がなくなると伝承されている。

なお大正時代まで、女兒の髪を短く切り、中央を丸く剃った頭（後には剃らないのも）を「おかっぱ」と呼んだ。

尻子玉 肛門の内部にある想像上の玉。これを河童に引き抜かれると、腑抜けになると伝えられた。

大正時代までは、気を付けろよ、とか、騙されるな、の代わりに「尻子玉を抜かれねえように気を付けねえ」と言う連中もいた。また、当時の子供は「勝っちゃん数の子鰯の子、お尻をねらってかっぱの子」と言いながら着物の尻まくりっこをして遊んでいた。

川通り 川に沿った道路。

地方 ここでは三味線を弾く連中のこと。踊る場合に三味線を弾く連中を地弾きという。地とは土台の意であり、踊りの土台は音楽にある、という考えから出来た用語である。

立方 地方の対語。ここでは立って踊る連中を指す。

ステテコ踊り 元来は乞食の単調な踊り。明治初年吉原の幫間が乞食から買い取って廓で踊っていたのを、三代目三遊亭圓遊（自称初代）が明治十年代に譲り受けて高座へ掛けたところ、爆発的な人気を受け、圓遊は一躍有名になった。頭を手拭で覆い、爺端折り（着物の後ろをつまみ上げて帯に挟み込む）の姿で臍を叩いたり、手を家鴨の首形にして動かし、時には半開きの扇子を逆さに持って忙しく踊りまくる。

ただ今では、たいへんに科学の進歩というので、お月さまへ写真機を据えまじたり、やがては月の世界へ旅行ができる、人間が住めるようなるってんで、気の早い方々今から土地なぞ買って……で、買っただけでもって目下家は建てられせんけれども、……そういう、その、進歩した世の中に、落語というものはたいへんにとぼけておりまして、たわいもないものというお思召もございましょうが、よく考えてみますと、実に取材が広うございまして、あらゆるものを嘶にとり入れております。先ず、お月さま、それからお日さま、それに雷なんて、な……この三ツつが揃いまして、下界へ下りて来まして……

「どうです? ……お月さま」

「なんですね? ……お天道さま」

「こうやって……名所古蹟をわたり歩いてゐるってえなァ……いい心持のものでござんすね……雷さま、どうだね?」

「え、あたしも、エエ……面白うございますよ」

「そうかい。じゃ、今夜のオ泊まりはこの旅籠に……」

ッてんで、一軒の旅籠に泊まりまして、……あくる朝になりますってえと、雷さまだけがお酒を飲んじまって……これ、もつとも、ごろつき、(雷の音に無頓着を掛ける)でございいますから、あんまり身持がよくないので、こんなになつて(寝相の悪い態)寝ちまつて……目が覚めて……

「(下手へ少し声を張り)おいおい……女中さん」

「(少し離れた処から)はァい……何でございます?」

「俺のオ相棒はどうしたい?」

「あァ……は、お月さまとお日さまでございますか? ……もうお発ちになりましたよ」

「ふウウん。月日の経つ「出発を掛ける」のは早えもんだ」

「ところで雷さま、あなたはいつ頃お発ちになります?」

「うウん……俺ァこうなったら、ひと眠りしてな、夕発ち」

「夕立に掛ける」にしよう」

なんてエのがありますして、……たいへんにこりゃァ、まァ、気がきいておりますな。それから形のなないものを嘶の主材にいたしまして、……たとえばあの河童とか、竜は雨を降らせる。で、『竜は雨を降らせる』と、こういう、まァ、言い伝えがございます。こういうものを扱った嘶がある……

「どうも、こうなんだねえ……日照り続きで困るねえ……ちっとも雨が降らねえな」

「(売り声) ええ……夕立屋ア……夕立！……夕立屋……夕立！」

「オオ？ ……面白いことを言ってくる人があるね、夕立屋？ ……あんまり聞いた事ことアない。もしもし！ ……夕立屋さん」

「へい、お呼びでございますか？」

「お前まえさん…なにかい？ ……夕立屋というくらいだから、雨を降らすかい？」

「へい、お望みに応じまして、いくらでも降らせます」

「それはありがたいね。降らしてもらおうじゃないか。代金かはいくらだい？」

「へい、お思召おもひめしでよろしうございます」

「そうかねえ。じゃ…ここへ五百文(分ノ一)置くがね、五百文だけエ降らしておくれ」

「へい、かしこまりました」

と、いなくなっちゃった。やがて、ずア、と……

「あアあ、ありがてエ…ありがてエ……涼しくなったねえ」「いかがでございます？」

「オオお、ありがとありがと。お前まえさんのおかげで雨が降ってね、こんなに涼しくなったよ。……けども、お前まえさんはただの人でないね？ ……雨を降らせる術を知っている。エえ？ ……一体イ…何だい？ ……お前まえさんは？」

「へへへへッ、おそれいました。……実は、あたくしは人間じゃございませんで……天に住んでおります竜たつでございます」

「アッ、道理でねえ。……大した術を知っていなさるね。もし夏ウこんな涼しく出来るんだから、冬も暖あたたかく出来るだろ？」

「へッ、それは、あたくしの伴で…子竜こりゅう「炬燵」です」

河童というものは、どなたもご覧になった方はない。しかし、あるものだという観念は、われわれ子供のうちからございました。むやみに泳いだりなにかすると、『河童に尻子玉しりごぎだまア抜かれる』…尻子玉しりごぎだまアてえのは何処にあるのだから、こいつも知らないんですが……まア、そういう伝説でございます。……河童の親子……

「おいおい…おい、お前も家やまン中ばかりで遊んでいねえで、たまには川かわ通りへ出て、人間の子供が遊んでたら、尻子玉でも抜いて来いよ」